

序章 邪な姉がかけた呪い

あたしはみずき。ジュリねえさんとサラねえさんの妹で地獄の者だ。あたしは愛する人テンジンの体の中に600年も眠っていたが、

ジュリがマンダラの笛を吹いた事で体が入れ替わり、テンジンの仲間、ヒガン・スバルと共に姉であるジュリ・サラと戦いそして勝利した。だが…ジュリは…

「このままで、済むと思うんじゃないよ!みずき!ハァッ」

「ぐおッ、ジュリねえさん一体あたしに何をしたの?」

「ふ、ふ、それはその内わかるさ…夜が明ければ、ね」(バタッ)

ジュリは死んだ。そしてジュリとの戦いが終わったあたし達は亀岡神社の宿屋に泊まる事になりあたしは眠りについた。だが…

「ここはどこだ?あ、あれは…もしかして」

「みずき…」

「テ、テンジン…もう会えないかと思った…」

「みず…」(バシャァァ)

いきなりテンジンは水に変化してあたしを襲った。

「テ、テンジン!!!どうして?ごぼっ」

あたしは溺れた…だけどそれは夢だった…夢?

「はっ…冷たい…」

あたしは目が覚めた。何故かお尻の方が濡れていた…どういう事だ…あたし、寝ている間に失禁をしてしまったのか?

「みずき…お前、オネショしたのか?」

ヒガンがそういうとあたしは何故か顔が赤くなって来た…あたしはヒガンにオネショについて聞いてみた…

「ヒガン…オネショってどういう事だ?」

「いや…寝ている間にオシッコを漏らしたって事さ…俺も昔よくやっていたよ」

「そうなのか?もしかしたらこれがジュリが遺した呪いかもしれないな…それだけで良かった気がするよ」

「まあ、みずきがそう言うのなら問題ねえけど、これから宿屋の人に謝んなきゃいけないぞ…」

「どうしてだい…」

「いや…布団や寝巻きを汚したからさ…そのままにしておくわけには行かないさ…それと寝巻き…臭くないか?」

「確かに臭いな…ごめんよ…あたし…オネショ、した事無いからさ…」

「落ち込むなよ。とりあえず謝りに行こうぜ。」

ヒガンがそういうと宿屋の人は亀国を救ったからという理由で多めに見てくれた。

そしてあたし達はミツコ姫がいるゲンブ城に向かった。ミツコ姫はあたしを見て…

「そなた…ジュリに呪いをかけられた様ですね…」

「ああ…どうやら…」

「言わなくても良いですよ…」

「だけどテンジンになればオネショはしないんじゃないのか？」

「そうだよね…それなら大丈夫だよ…元気出してみずき」

「ああ、そうか。そうだよな…」

「甘いですね…ジュリの呪いはそんな甘いものではありません…」

「どういう事なんだ？」

「みずきとテンジンの体は二心一体、すなわちテンジンにも呪いがかかっているということです」

「ええ!そんな…じゃあテンジンもオネショを…」

「酷いよ!かわいそうだよ…そんなの」

「そうか…それならテンジンにオネショをさせるわけにはいかないよな…」

「テンジンを寝かせない気か？」

「そういう事になる…あたしはただ、テンジンに、火の一族のテンジンの名誉を守りたいんだ」

「いいのかよ…それで」

「ああ、だってあたしは地獄の者を裏切った…だから…この呪いは裏切者の報いさ…そう割り切らないといけないんだ…」

「みずき…」

「ねえミツコ姫様、どうしたらみずきのオネショ治るの？」

「おそらくニニギを封印すれば呪いは解けるはずです。ですがそれまでは…」

「寝れば必ず布団を濡らすのか…」

そしてあたしは今の現状を割り切りゲンブ城を後にした…これから毎日オネショをするということは宿屋の人やヒガン達に迷惑を

かける事になるんだよな…

だけどあたしはただテンジンに屈辱的な事を与えたくない。ただそれだけだった…

## 第1章 ヒガンもスバルも…

あたしがジュリにオネショをするという呪いをかけられてから3日経った。あたしは宿屋に泊まればオネショをしてヒガンはとにかく宿屋の主人に頭を下げるだけ…

今は亀国と犬神国のちょうど境目にある小さな宿屋に滞在している。

「ごめんよ…ヒガン。またやっちゃってさ」

「仕方ねえよ…宿屋の人も仕方ないって言ってくれているし…」

「えっ…どういう事だい」

「まあ汚した布団や寝巻きを俺達で洗えば、宿代はそのままって事さ」

「それだったらあたしが…」

「いや、それは俺がやってやるよ…みずきは呪われたんだ…だからといって俺は何もしないわけにはいかなくてよ」

「ヒガン…」

「ねえヒガン…スバルは何をすればいいの？」

「お前もやってみるか？」

「うん。結構大変だね…お洗濯って」

「俺は故郷でよく洗濯してたからさ…父ちゃんも母ちゃんも死んじゃったしさ…慣れてるんだ」

ヒガン達が洗濯をしているのを見てあたしは自分の不甲斐なさ、悔しさに涙が出た…

「泣くなよ…みずきは俺達の仲間なんだから…いっぱい甘えてもいいぜ」

あたしは声も出ない…こんな若いヤツに気を遣われているなんて…

「はあ…みずきがこんなんじゃな…犬神国に行くのはまだ先か…」

「そ、そんな…あたしは大丈夫さ…ただオネショするだけだしさ…」

「いや…ダメだ…みずきが安心するまでは…この宿屋の世話になろうと思う…宿代はそんなに高くないし…」

「ヒガン…」

少し気まづくなくなったその日の夜…あたしは、ため息をついてばかりだった…だけど…

「お嬢ちゃん、寝る前にそんなにお茶飲んでどうする気だい…」

「これはね…みずきをひとりぼっちにさせないためにやっているの♪」

あたしはスバルが茶をがぶ飲みしている所を目撃した…ひとりぼっちって事はスバルはあたしのために…なんてヤツだい…

そして就寝の時間がやってきた。

「おやすみなさい…ヒガン、みずき」

「ああ、おやすみ」

こうしてスバルから先に眠りにつき…次はヒガン…そして最後はあたしだった…

翌朝あたしはまたオネショをした…昨日よりも大きいシミだ…またヒガンを困らせるなど

感じたその時…

「ねえみずき～みてみて～」

「なんだい…スバル？」

「ホラ、あたしもいっぱいやっちゃったよ♪」

なんと、スバルもオネショをしていた…あたしよりシミは広くないけど…何でか安心した…

「本当だ…じゃヒガンも…」

あたしはまだ寝ているヒガンの布団をめくって見たけど…濡れてはいなかった。確認したその時ヒガンが目を覚ました…

「どうした？みずき」

「い、いや…スバルがオネショしたからさ…もしかしたらヒガンも…と思って…」

「俺は昔の頃に治ったよ…ってなんでスバルが…」

「でへへ…だってみずきをひとりぼっちにさせたくなかつただもん…」

「はあ…洗濯が増えたな…」

「でも…あたしにもみずきのためにやれる事見つかったから!嬉しいよ」

「ふふっスバル…ありがとう…」

「おお…みずきが笑った!元気になったな!」

「うん、良かったね!」

「あんた達を見てるとオネショも悪くないなと思ってさ」

「そうだぜ!みずきもスバルもいっぱいオネショしていいんだぜ!俺は濡れた布団や寝巻きを全部洗濯するから…なんにも悩む事は無いぜ」

「ヒガン…」

「さっ2人とも…洗濯物出してくれ」

「じゃ、お願いしま～す♪」

「頼んだよ…」

あたしは嬉しかった…こんなに優しくしてくれるなんて…こいつらはあたしに元気を与えてくれるから…

テンジン、あんたはいい仲間を持ったね…こいつらとなら上手くやっていける気がするよ…

## 第2章 親切オミネが…

あたし達火の勇者は、今犬神国の大虎村の宿屋にいる。あたしはジュリの呪いでまたオネシヨをした…でもヒガンは洗濯してくれて

スバルもオネシヨをするから全然寂しくない。だけど、今回は何だかピリピリしている…あたしは何かあったのかとヒガンと宿屋の主人とのやりとりを覗いてみた。

「どういう事ですか？敷布団を弁償しろって？敷布団は俺が洗濯するからさあ！」

「ですから…大切を商品を汚されては…それに洗濯しても汚れが必ず落ちる保障はありませんし…ですのどとにかく1万両弁償して

貰いますよ」

「分かったよ…」

1万両を払ったヒガンはイライラしながら主人から離れていった所をスバルは訪ねた。

「ねえどうしたの？ヒガン。何でそんな怒ってるの？」

「さっさと出るぞ、気まずすぎる…」

「う、うん…」

あたしにはわかる…大虎村はお金にうるさい村…潔癖症な人間も少なくはない…だからあたしは

「ご、ごめんよ…ヒガン…あたしが」

「お前のせいじゃないよ…」

「ごめんね…あたしがわざとオネシヨしなかったら…」

「だから謝るなよ…悪いのは金にうるさいあいつらさ…」

「だけど、もしかしたら…この先にある花丸町にも金にうるさいヤツがいるかもしれない…」

「問題ないさ…火影村にいけばいい…『天駆』があるだろ…そこならみんな優しいぜ」

「ヒガン…」

あたしとヒガンがため息をついた時…

「フェフェフェ…大分お困りの様じゃの…」

「あ、オミネばあちゃん」

「わは～久しぶり～」

「誰だこの婆さんは…」

「ああ…みずきは初めてだったな…この人はオミネばあちゃんだ…俺達の役にたつ道具を売ってくれる人さ」

「そう、人はあたしの事を『親切おミネ』って呼ぶぞい…」

「でもおばあちゃん…お困りの様っていつまでたけど…」

「おおそうじゃった…お前さん達相当ぼったくられた様じゃな…顔に出とるぞ」

「そうだよ…悪いかよ…」

「まあまあ…そんなスバル嬢ちゃんとみずきという長身の姉ちゃんにいいものがあるんじ

やよ」

「なんだ？」

「これじゃ!!」

おミネ婆さんが出したものは白い布が沢山集まったものだった。ヒガンは知っている様だ。

「それってオムツじゃねえのか？」

「そうじゃよ…2人合わせて5000両ってとこじゃよ…」

「それもぼったくりじゃねえかよ」

「ヒガン…あたし…欲しい…」

「ねえねえヒガン。オムツって面白そう…可愛い名前だし…オムツ～オムツ、オ・ム・ツ～♪」

「ったく何にも知らねえでよ…分かった買うよ!」

「フェフェフェ…まいど～…」

その夜宿代をぼったくられなかった砂金村の宿屋であたしとスバルは『オムツ』を着けてみようとしたり…だけどなんでか一人では

着けにくいので、ヒガンにやってもらうことにした…手馴れた手つきでオムツをあてるヒガン…

「どうしてそんなに手際いいんだい？」

「日影村の赤ちゃんのオムツを取り替えた事があったんだ…」

手馴れた理由を知って時ヒガンは少し顔が赤くなっていた。きっとあたしの股間を見て…

「なあヒガン…変な事聞くけどさあ…あんた…好きな女はいるかい？」

「おいおい何だよ急に…そんなのいねえよ…今は戦いばかりでそんな気分じゃねえんだよ…」

「ふふっ意外だねえ…」

「ほれ、終わったぞ…さて次はスバルだな…」

「は～いお願いしま～す♪」

ヒガンはスバルにもオムツを当てるが、全然照れない。きっとあたしの毛の生えた股間つまり成熟した女の股間を見て照れたんだな…

スケベなヤツ…でも着けてくれっていうあたしもあたしか…

そしてあたし達は眠りにつき…朝を迎えた…

目が覚めたあたしはオムツを確認した…オシッコをいっぱい吸ってずっしりと重くなっているが、布団や寝巻きは濡れてない…

凄いな…これがオムツってヤツか…

「おはよう。ヒガン…」

「ん、どうしたみずき…オムツはどうだ？」

「この通りだ…」

「バカ…見せなくていい。今洗ってやるから…お前は風呂入って来い」

「わかったよ」

あたしはヒガンに汚れたオムツを渡した。スバルもあたしみたいになっているかと思ったが…なんでか布団を濡らしていた…

「はぁ…でも砂金村にしといて正解だったぜ…」

「オムツって完璧じゃないんだな…」

「まだいたのかよ…んなもん見せなくていいから…早く風呂行けよ…」

「もうちょっといさせてくれよ…」

「しょうがねえな…おいスバル起きろ」

「んにゃ…あれれ～お布団濡れてる…どうして～」

「寝相が悪かったんだ…仕方ねえよ…スバルもみずきと一緒に風呂入ってこい…」

「うん。わかったよ…」

そしてあたしとスバルは一緒に風呂に入った…そしてあたしはスバルにこんな事を聞いてみた…

「なぁスバル…ヒガンにあんたの裸を見られて何とも思わないのかい」

「ん～わかんない…でも最近ちょっと恥ずかしいかなっと思って…でも、それがどうかしたの？」

「そうかい…いや、なんでもないさ」

きっとヒガンは大人の女に弱いというか…「性」を意識する年頃なんだよな…照れて当然か…

でもこんな事もいいかもしれないな…でもその内あたし…テンジンじゃなくてヒガンを好きになるかもしれないな…

テンジンもきっと許してくれる…かなあ…わかんないや…